

イ エ イ ツ 最後の動揺

小堀隆司

(一)

迫り来る圧倒的な死に取りこまれてなおも詩作に励むイエイツは、最後まで仮面の詩人としての面目を失うことはなかった。仮面の詩人は、△存在▽を求めてあるがままの自身があるべき生という自分とは対照的な生を創造する点において、その名に適しい面目を保っているとまずはいえよう。しかし、イエイツの仮面はそこにだけ留まろうとはしない。イエイツにあっては、そのような順接的な展開だけでなく、いうならば逆接的な展開もまた仮面を巡る生に重要な意味をもたらしているのである。イエイツの詩に散見される仮面の創造は、決まってそこに赤裸な生の気配を再び漂わせる。仮面を創造する限り、必ずそこには仮面の崩壊もしくは素面の露呈を伴うのであって、仮面の創造もその崩壊とともに彼固有の生という同一の空間で表裏一体となって惹起されるのでなければならない。ならば、ついに仮面を外してあるがままの素顔を晒け出してしまおうとする試みの裡には、再び仮面を被ろうとする意志の潜在していることも疑い得ない。仮面と素面との、その境界も定かならぬ拮抗を忌避することなく持ち堪えるところに、そもそも仮面の創造も素面の露呈も可能とされるのである。単に素顔を覆い隠しただけでは誕生するはずのない仮面の詩人は、仮面と素面の果てることのない拮抗・闘争に終止符を敢えて意識的に打たず、そうした闘争を絶えず演じる生

に、△存在Vへの途を垣間見る。その生の道程において、被りおおせたはずの仮面から赤裸な顔を思わず覗かせてしまふこと、あるいは自ら晒け出そうとすることを必然として受け容れたとき、詩人はそのときこそ真に仮面の詩人たる面目を保つに至る。逆接的展開とは、まさにこの意味においてである。

このように拮抗し闘争しつつ顫動する生の磁場に詩の宝庫を見出したイエイツは、死を間近にしたその眼底に、悲劇的生から遠く離れて自分を凡庸な人間に変身させようとする△英雄Vと、僅かも妥協を許さずに、自身の信じた生に固執しようとする△兵士Vを浮べる。そして眼底に浮んだ二つの幻像は死の間際に書いた二つの詩においてそれぞれ造型されることになるのだが、ひとつは仮面あるいは△存在Vの問題に背を向けていわば諦念の域へと到達しようとする生を身に纏い、いまひとつはその逆に、△存在Vへと肉薄しようとして自らを呪縛するかのような生を仮面として演ずる。仮面から素顔を微かに覗かせてしまうこと、または覗かせようとすること、そして完全に素顔を仮面で覆ってしまうこと、これらの生は、仮面から素顔へ、素顔から仮面へと変転するといった円環的な生を形成し、仮面の詩人イエイツにあっては最後まで同一の磁場でしかも殆んど同時に展開されるべきものであった。それにしても、顫動する生の磁場において、対照的な二つの幻像を視る彼の思いは恐らく動揺していることであろう。

さて、諦念としての生と呪縛としての生との狭間を抗い、そして動揺する内面に浮んだ二つの幻像は、渾然一体となつてその裡に低迷しつづけようと意志する新たな生を孕んでいる。そのような生の意志の誕生は、たとえば二つの幻像が詩人の心眼に同時に浮ぶとき、つまり相対立する位相を帯びた諦念と呪縛が不即不離の關係に至るときに、初めてその実現を見るのである。仮面を外して彼岸(死)への誘いに応じたかと思えば、仮面を被って此岸(生)への執着を再び強めるという分裂、またその逆に此岸への執着が彼岸への憧憬を誘発するという分裂——このように分裂が激烈で重層的に起れば起るほど、動揺しつつ低迷する生はいつしか揺ぎない生への確信を深めるにちがいない。兩岸に眼を向けたまま分裂を幾重にも余儀なくされたとき、低迷する生は低迷にこそ生の何かが予兆されるのだとい

た逆説を、最後に遺してイエイツは逝った。

一九三九年、一月二十八日、この世を去った詩人は、その数週間前に、両極の狭間に低迷する生を、二篇の詩のなかで描いた。いうまでもなく、二つの詩はそれぞれ独立した別個の作品ではあるが、しかしその低迷する生に注目してみると、必ずしもそうとはいえない。なぜならば、そうした生は二つの詩をもって初めて浮き彫りにされるからである。一個の作品とも連作詩ともいふべきその二篇の詩とは、すなわち「クフリーン慰められる」'Cuchulain Comforted' と「黒い塔」'The Black Tower' である。一九三九年一月十三日に完成した「クフリーン慰められる」においては、あるべき生（仮面）の象徴として創造された悲劇的英雄クフリーンの、まさに死の門をくぐり抜けようとする際、かつての勇姿からは想像もつかないほどに似つかわしからぬ姿に変身する様子が描かれている。それはそのまま、死に逝く詩人自身とも重ね合わさるであろう。しかし、詩人は安らかに死に就こうとするクフリーンを認める気にはなれなくなる。どうにも悟りきれずに揺らぐ内面には、やがてそれとは対照的な人物が映し出される。こうして詩人は、クフリーンに代って△兵士▽を「黒い塔」に登場させる。俗世を超越するかのようにならぬ古塔をひたすら守りぬこうとする△兵士▽の敵しい意志に、詩人の生が擬制される。自らを敵しく強いる△兵士▽の意志は、△英雄▽の変身しようとするあの意志に関しては概ね否定的である。外からの誘惑や敵の脅威に屈せずして古塔を守りぬ△兵士▽のそうした姿勢には、△英雄▽という仮面を剥がそうとするクフリーンを頑なに拒絶する決意が刻み込まれているのだということを、「黒い塔」はまず第一に訴えている。この世を去る一週間前に、イエイツは△兵士▽の烈しくも敵しい生を突きつけるのであった。

このように仮面と素面を巡る円環的な生は必ずしもその円環を閉じてはいず、いわゆる弁証法的な総合・調和をもって完成されるわけではない。たとえその調和を目ざしたとしても、その不可能性はすでに詩人の認識しているところである。少なくとも二律背反の渦に巻き込まれて動揺する内面が、アイロニカルにも詩人の被るべき仮面の要諦

とされる。確かに動揺は、たとえば時に仮面を外して諦念の境地へと、また時には仮面を被って呪縛としての生へと誘われもするだろう。しかし、それら無視されざる生の方位はさておき、このように両極に意識を向けて動揺する内面の磁場に低迷しつつ立ち尽くすということ、これもまた、イエイツ詩においては無視できない点である。イエイツはそれを揺ぎない事実として、換言すれば入存在Vを目ざす実存の原基として定着させようとしたのではないか。かつて彼はその名も「動揺」'Vacillation' という詩のなかでこう語っていた。

Between extremities

(一)

Man runs his course;

「両極端に狭まれて／ひとは自分の人生をゆく」と書くイエイツは、両極の必要性、両極のなかを動揺しつつ迷走する生の必然性を唱えている。また『最後詩集』*The Last Poems*にある「ベン・バルベンの麓に」'Under Ben Bulben' *じが'*

Many times man lives and dies

Between his two eternities,

That of race and that of soul

And ancient Ireland knew it all.

(II, 13—16)

と歌われているように、「二つの永遠性」、つまり「民族の永遠性と魂の永遠性」という両極に、人間の生き死を詩人は見ようとするのであった。

(二)

「クフリーン慰められる」は、その冒頭から、戦いに傷つき果てた英雄を登場させ、悲劇的な生涯の終焉を宣言している。

A Man that had six mortal wounds,
a man Violent and famous, strode among the dead;
Eyes stared out of the branches and were gone.

Then certain shrouds that muttered head to head
Came and were gone. He leant upon a tree
As though to meditate on wounds and blood.

(ll. 1—6)

「致命的な傷を六ヶ所も負った男、気性の激しく名の知れた男」、クフリーンは、古代アイルランドのひとつアルスターに君臨するコノハー王の家臣としてこれまで数々の武勲を重ねてきた。しかし、ついに力尽きてしまい、その勇姿のいまは見る影もない。その無惨な姿をひきずりながら「死者たち」の前に歩み出たクフリーンは、死の迎えをた

だ待つかのようにして独り「一本の樹に凭れる」のである。⁽²⁾するとそこに、死の世界からやって来た「経帷子たち」が彼を迎えにやってくる。深傷を負っているにも拘らず、なおも英雄の迫力に圧倒されたためであろうか、それとも「一本の樹に凭れて」死に瀕しているクフリーンの姿に無気味さを感じたためであろうか、近寄ってはみたものの、彼等はすぐさま恐れをなして退散してしまう。その姿はまるで「受けた傷と血に瞑想を巡らしているかのように」見受けられる。独り佇むクフリーンは、迫り来る死を受け容れながら、果していかなる思いをその「傷と血」に向けて抱懐してゐるのだろうか。「一本の樹に凭れる」クフリーンのその姿に秘められた「瞑想」の向かうところ、すなわち「傷と血」とは、悲劇的英雄の犯した数々の罪の、いわば刻印として象徴化されたものであると考えられよう。そしてそれらは、あまりに烈しかった自身の境涯を想い起こさせるに充分である。

「傷と血」を見凝めて巡らずクフリーンの「瞑想」は、このように悲劇的英雄としての生の来し方に加えて、当然、来るべきもの(死)へと向けられる。そしてさらには、死を迎え入れつつ過去を回想する「瞑想」は、そうした時の流れから超出した普遍性の域へと拡張される可能性を孕んでいる。それと密接に関連して、見るも無惨に深く負った「傷」と眼前に流れ出る「血」とは、罪深き生の傷跡としてだけでなく、自身の原点もしくは悲劇的英雄の負うべき宿命そのものをも象徴化したものにちがいない。「傷と血に瞑想を巡らす」という行為は、クフリーン自身の過去や来るべき死を「瞑想」の射程に入れるのももちろん、さらに人間存在の何たるかという普遍性の問題、あるいは人間の宿命という問題にまでにその射程を伸ばす可能性を秘めてはいまいか。こうした飛躍が架空でないとするれば、その可能性が現実のものとなったとき、そこには大きな転回が惹き起される。その事態を支える転回点とは、二律背反に引き裂れた生の、ある方位からそれとは逆の方位へと志向する決定的瞬間を指している。ただし、その瞬間が顕現するためには、二律背反における分裂や葛藤が再び起るのでなければならぬ。普遍的な∧存在∨の問題が意識される可能性は、この詩をさらに読み進むにつれて明らかにされるであろう。

(7)

こうした「瞑想」に浸りながら佇立するクフリーンの方に、もう一度死者が、しかも以前とは違ってなかでも選り抜きの「経帷子」が単独で歩み寄って来る。この死者の出現は、「瞑想」の永久的な停止を予兆させるかのようだ。

A Shroud that seemed to have authority

Among those bird-like things came, and left fall

A bundle of linen.

(II, 7—9)

クフリーンの傍らに置かれた「一束の麻」とは英雄の象徴である剣の代りとして死者によって運ばれてきたものだが、それが彼の着るべき「経帷子」を暗示しているのはいうまでもない。かくして生としての剣と、死としての「一束の麻」が対置されてそこに生と死のせめぎあう空間がしつらえられる。「経帷子」(死)の再登場によって「瞑想」(生)の中断が予想されるように、「一束の麻」が運び込まれることによって剣(生)と「一束の麻」(死)の造り出すであろう特異な空間に二律背反における分裂・葛藤もまた予感される。生から死のほうへ渡ろうとするクフリーンは、いよいよ死出の旅への誘いかけをされる。死者であるがゆえに剣を恐怖の対象と見ている「経帷子たち」のなかから、「麻を運んできたもの」‘that linen-carrier’すなわち単独で登場したあの「経帷子」が、クフリーンにこう確約するのである。

‘Your life can grow much sweeter if you will

‘Obey our ancient rule and make a shroud;’

激烈な生を悲劇的に生きて来たあの英雄の姿からは程遠く、氣迫の殆んど感じられないクフリーンだが、その彼が「経帷子を作る」という行為に及ぶならば、「より愉しい生」がもたらされる、と「経帷子」は約束してくれる。激烈な生に対し、その対極として「より愉しい生」が措定されることによって、そこにはクフリーンの生における両極の方位が配置されているのに気づく。だが、彼に約束されたものが、「愉しさ」を湛えた生であるのはなにゆえか。むしろ静寂なる死ではないのか。それは死後の世界において回帰すべき生という条件づけられた位相を物語っているためであろうか。

そのような確約をした「経帷子」はさらにその作り方に関して具体的に指示する。「私たちは針の目に糸を通すのです。しかも私たちみんなでしなければなりません。」「We thread the needles'eyes, and all we do/All must together do. (II, 16—7)」とこのように指示されると、それをそのまま受けとめてクフリーンは従順にも自分の「経帷子」を縫い始めるのである。そうして最後に死者は、死後における「より愉しい生」を待ち望みつつ縫い始めたクフリーンに、その世界へ昇るための更なる行動を促す。つまり、「さて、私たちは歌わなければなりません、できる限りうまく歌わなければなりません。」「Now must we sing the best we can, (I, 19)」とクフリーンに向かって死者は囁くのである。その見る影も殆んどなくなった悲劇的英雄の勇姿を、いま、まさに完全に脱ぎ棄てようとする決定的瞬間を彼は迎えるに至った。さて悲劇的英雄という名を冠した生涯をこのように自ら閉じようとするクフリーンは、死者の誘いに応じて実際に「歌をうたう」ことができたのであろうか。そして本当に「より愉しい生」に浴することが可能なのであろうか。二律背反のなかを動揺する生に、生の生たるゆえんを見出した詩人からすれば、これまでのクフリーンとは似ても似つかない馴致された弱々しい姿は、果して許容され得るものであろうか。察するに、

その決定的瞬間とは、死の世界へと旅立つ瞬間というより、むしろその旅立ちへの拒絶を物語ってはいまいか。また別の見方をすれば、決定的瞬間とは、死の世界か生の世界か、としばし峻巡して立つ魔とでもいうべきところだろうか。あれか、これかと動揺しながらもついに存在論的決着を強いられる局面を、それは暗示しているといえなくもない。その真偽は後に論ずることにして、さらに問題点を幾つか剔出してみたい。

ところで「歌をうたう」誘いかけをした直後、死者が自らの「性格」について告白する件りは、奇妙だが注目値する。つまり自分たち死者は「近親のものたちに虐殺されたり、家を追放されたり、また恐怖のうちに死んで見棄てられたり」「by kindred slain/Or driven from home and left to die in fear.」して、いかに「咎められるべき臆病者」「Convicted Cowards' (ll. 21) として生前を生きていたかを告白するのである。「致命傷」を受ける以前はいかにクフリーンが自分たちと正反対の気性を持っていたか、そして鋭い牙を剥ぎとられて柔順になったいまでは、いかにクフリーンが自分たちと同類の存在と化しているかを、死者はその告白を通して確認しているかのようだ。生の世界では△勇者▽であったものと「臆病者」であったものは、逆に死の世界にあっては等しく死者として、いや、「より愉しい生」を身に纏ったものとして行動をとものにすることができるといえる。このように「より愉しい生」を約束して死の世界へ誘い込む死者は、最後の手続きに「歌をうたう」ことを提示することで役目を果たしたかに見えるが、それにしても、なぜこのように生前の行状が言及されたのだろうか。生前における出来事はもはや想起されるべきときではないのではあるまいか。ことによると、死者の生前における「性格」の告白は、死を拒絶して生へと舞い戻るといふ、死に逝くクフリーンにとっては、あまりに不可能な逆説的な反転を惹起する契機となったのではないだろうか。さて、全員で歌ったであろうその「歌」から聴こえてきたものは何かといえ、それはもはや「人間の調べ」でも「人間の言葉」でもなかった。死の世界での現象ゆえと見做すべきだろうか、凡そ人間らしきものの気配は一切感じられない。果してこれはどうしたことなのか。そのわけは次の最後の一行が語っている。

They had changed their throats and had the throats of birds.

(1, 26)

もはや人間の、ではなく「鳥の喉」をすでに持っていたがゆえに、その調べには人間らしきものが響き渡ってこないのである。「鳥の喉」を持つに至った「彼等」がそのようにして「歌う」とき、そのなかにクフリーンを認めることはできるだろうか。そもそも「彼等」とは何者なのか。死者の言葉に誘われて「経帷子」を縫うクフリーンは、すでに変身を遂げて従順になったということであるならば、死者として「彼等」とともに「歌う」のが当然だと考えるべきだろうか。では、クフリーンが「経帷子」を縫い始めたときに、それを認める指標として彼を「その男」と明示していたのに対して、「歌をうたう」この場面では不明のままになっているのはなにゆえか。実際のところ、彼はそのような声で「うたう歌」には参加しなかったのではあるまいか。「経帷子」を身に纏って「歌おう」とするまさにそのとき、彼は死と生の境界に、別言すれば、「鳥の喉」をもって「歌う」場所の、つまり死の世界の一步手前にとどまっ
てはいまいか。生と死の境界に停滞する様が、何かを、たとえば死を躊躇している姿勢に見えようと、あるいは生の高揚を決断する姿勢に見えようと、それは今さしあたって重要視すべきことではない。何よりも問題なのは向う側の一步手前にとどまっているという姿勢なのである。そうして向う側への一步を踏みとどまることは、再びあの「瞑想」へと回帰する機運を胚胎しているにちがいない。再び「一本の樹に凭れる」であろうクフリーンは生と死の狭間を彷徨いながら「傷と血」のことを思い返しはしないだろうか。だとすれば、自身の来し方への△回想▽を第一に意味したクフリーンの「瞑想」は、△回想▽の裡に自身のあるべき姿勢を望見するという眼差しへと接合される可能性を
確実なものにしているといえよう。そしてこの眼差しが「黒い塔」に投げられるのである。

生と死の狭間で、あるいはこちら側に踏みとどまって再び「傷と血」に「瞑想」が巡らされたとき、それを受けた眼差しはあるべき生の在処に向けられる。かくして一步手前で思い直して巡らす「瞑想」の裡にこそ、イエイツ最後の詩「黒い塔」の誕生する必然性があつた。「慰められるクフーリン」と「黒い塔」とが密接な関係にあることを考へれば、死者といっしょに「歌おう」とする決定的瞬間は死出の旅（つまり「歌」）を拒絶して、高揚した生を描く「黒い塔」へと連結さるべく死の一步手前で停滞しようと決意する瞬間でもあることが確認されよう。分裂・葛藤を強いる二律背反のなかを動揺しつつ低迷する生、そして生から死への志向が死から生への志向に還帰するという反転。低迷する生がついにそのような還帰を試みるとき、それは存在論的決着をつける決定的な瞬間といえる。しかし、両極の狭間を迷走する動揺そのものが決定的な瞬間を支えているのだということは忘れるべきではない。換言すれば、決定的瞬間とは、大きく揺れて低迷する生を必然として生きようと決意する瞬間から、低迷から一方の極へと跳躍する瞬間まで包含するのである。

(三)

烈しかった生からの退却を撤回すること、静謐なる世界への誘いから逃れること、このような死への拒絶をもってあるべき生の在処に照明をあてようとする姿勢は、「クフーリン慰められる」でもその予感として多少窺うことができたが、「黒い塔」においては極めてはっきり看取することができる。そうした姿勢を共有する二つの詩は、一方ではそれ以上に対照的な傾向を帯びている。それは拒絶する烈しさの強度において対照的なのである。「黒い塔」の書き出しがいきなり命令口調で始まるのも、なによりそのことを伝えている。

Say that the men of the old black tower,

Though they but feed as the goatherd feeds,
 Their money spent, their wine gone sour,
 Lack nothing that a soldier needs,
 That all are oath-bound men:
 Those banners come not in.

(II, 1—6)

凋落した生に身をやつした「黒い古塔の男たち」の喪失したものは測り知れないが、なおも堅持しつづけているものがある。「兵士」の名に恥じないもの、だが殆んど時代錯誤のような、あるいは狂気と呼んでもいいようなものが、唯一残されている。忠誠を捧げるべき国王もいないまま、「古塔」を守ること自体ナンセンスと見られても不思議ではない。「兵士」は、なおも「誓いに縛られた男」としてその任務を果たそうとする。

アイルランドを敵の手に渡すまいと、幾世代にも互って戦いを繰り返してきた歴史を、あるいは神話に描かれているごとく、幾つかの小国から成っていた古代アイルランドでの、それぞれの国との戦いを寓意化した作品として、この詩が一方で読まれるのも否定され得ないだろう。そうした文脈で読むと、即座にイギリス対アイルランドという図式が浮んでこよう。因みにイェイツ夫人はこの作品を「政治的プロパガンダ」をねらいとした詩と見做している。また、この「黒い古塔」に言及してJ・ストールワージーは、それがイェイツそのひとでもアイルランドでもあると指摘しているが、さらにその意味を寓意的に拡げていわゆるナチに脅された当時の世界でもあると述べている。⁽⁴⁾

ともあれ、そのような寓意的な読みから眼をそらして人間の生に焦点を絞ってみると、「黒い塔」という詩は、敵の嚇威に屈せず、またその策略にも買収されず、さらには味方の朗報をも受け入れずに、ただ国を守るべく「誓いに

縛られた男」の倦まず弛まぬその姿勢を、主調低音として歌っていることに気づかされる。そうしてその姿勢は三度のリフレインで歌われているように墓に眠るものたちのそれと類縁関係を持つ。

There in the tomb stand the dead upright,

But winds come up from the shore;

They shake when the winds roar,

Old bones upon the mountain shake.

(II, 7—10)

永遠の眠りに就くことすら許されず「直立シタママ墓ノナカニ立ツ」という姿勢を崩すことのない「死者」は、「兵士」と同様、時間を超越して、換言すれば、いわば生も死をも超然と撥ねのけて守るべき何かにひたすら忠実であるような、しかも呪われたものとして描かれている。海から吹きつける「風ガウナリ声ヲアゲルト」、直立した「死者」は「ソノ体ヲ震ワセル」という。時代からとり残されてひたすら何かを守り通す「兵士」といい、「墓ノナカデ直立スル死者」といい、詩人はそこに何を見ようとするのか。とりわけ前者にあっては、詩人はそこに「兵士」の「兵士」たるべき存在Vの証しを見るのである。そうした存在証明を時代に抗して敢えて虚しくも掲げようとする「兵士」の姿勢を、人間の存在Vのアレゴリーとして誕生させたいと希っている。また、この「風」はアイロニカルにも「兵士」を「誓いに縛られた男」に仕立てた敵とも、腐敗した時代の風潮とも考えられよう。たとえばR・F・ピターソンは「風」に二重の意味を持たせて次のように論じている。すなわち、「山ノ上ノ枯骨」を震わせる「風」は、アイルランドの伝統的な秩序の崩壊に伴う廃退と変化の「風」であるが、同時に新しい秩序の到来を告げる予言

となって吹きすさんでいると、このように指摘している。⁽⁵⁾

△存在Vを体現すべき「誓いに縛られた男」として生きようとする「兵士」の姿勢が、人間の、△存在Vを目ざす生そのものを象徴したものであれば、「兵士」という人物は△存在Vに至るべき仮面を被ろうとする人間を、さらには詩人をも仄めかしているであろう。「兵士」の生とは、それゆえ人間の実存形態のひとつに数え挙げられる。ところで「誓いに縛られた男」として「古塔を守る兵士」は、なおも生きている詩人を除いては、すべて故人である。彼等は、三度のリフレインに歌われているあの「死者」(もしくは「枯い骨」)でもあったわけだ。イェイツは、このように「兵士」と「死者」を描くことによって、△存在Vに至ろうとする忠実な生の、いかに歴史のなかに連綿とつづいているか、というその実存の有様を訴えている。いや、もはや△存在Vに忠実だというよりも、むしろ△存在Vに向けて自らを強いるという呪縛された実存を掲げているというべきであろう。

「兵士」の守るべき役割を全うするようにと、語り手自らが命令口調で宣言した最初の連に対して、第二連では、「誓いに縛られた男」として生きるように強要された「兵士」の嘲笑さるべき無意味な生を、語り手は敵側のものに語らせている。

Those banners come to bribe or threaten,

Or whisper that a man's a fool

Who, when his own right king's forgotten,

Cares what king sets up his rule.

If he died long ago

Why do you dread us so?

「兵士」を「買収しに、あるいは威嚇しにやってくる」敵側のもの、つまり「あの旗たち」は、玉座に就くべき「王」のいないことを気づかう「兵士」の、そうしたことの甲斐のない愚行を非難する。この連での語り手は、第一連とちがってもっぱら敵方の「兵士」に対する関り方として「あの旗たち」による「兵士」への策略について述べている。「あの旗たち」は「誓いに縛られた男」の姿勢そのものを放棄するように口説くのである。「とうの昔に王が死んでしまったのなら、どうして我々をそんなに恐れるのか」と、自分のほうに取り込もうと説得する「我々」とは、したがって「旗」を掲げて「黒い塔」に忍び寄ってきた敵、すなわち「あの旗たち」であるのは、改めていうまでもない。こうして詩は、「誓いに縛られた男」として生きるという実存の堅持と、その放棄とが拮抗して生の磁場に対峙するという場面を設定する。

頑なまでに「誓い」に忠実な姿勢を崩そうとする敵の、誘惑とも強迫ともとれる言説を受けて再びあのリフレインが響き渡るとき、その響きは実に効果的といえる。心を虚しくするかのごとく、何処へともなく無機的に、しかも力強く流れている。語り手の歌う詩に伴って共鳴するリフレインは、思うに「兵士」にもその敵にも加担することなく、あるひとつのことを告げているかのような。その、伝えるべきあるひとつのことは、果して何か。「黒い塔」にあっては、重要な意味を荷なっているはずのリフレインは、第三連まで読み進んだ時点でその意味が明らかにされるだろう。

そこで第三連に入ると、今度は敵の強迫的な誘惑から逃れて「兵士」は好機の訪れに際会する。

The tower's old cook that must climb and clamber

Catching small birds in the dew of the morn
 When we hale men lie stretched in slumber
 Swears that he hears the king's great horn.

But he's a lying hound:
 Stand we on guard oath-bound!

(II., 21—26)

塔に住む「年老いた料理人」は朝早く、「小鳥を捕まえに塔の階段を登る」のが務めだが、まだ「兵士」の寝ているある朝にこう呟くのである、「確かに王様の角笛の音が聴こえるぞ」と。忠誠を誓うべき当の王様もいないままに、自らを「誓いに縛られた男」としてその姿勢を堅持しようとする「兵士」、またそうした姿勢を放棄するようにと誘惑される「兵士」、このように「兵士」の立場は異なっているが、どのみち不利な状況に追いやられている。したがって、「年老いた料理人」の言葉はまさに朗報に聞こえたにちがいない。しかし、不思議なことに「兵士」の振舞いはその当然の成行きを覆してしまふ。朗報かもしれない「料理人」の言葉を、たとえそうだと受け取ったにしても、「兵士」は信じようとする気持ちなど初めから持ち合わせていない。「奴はほら吹きの獵犬だ」と言下にそれを否定して、救いをもたらすはずの「料理人」の言葉を敢えて無視するのである。そうして「兵士」は第一連で採った姿勢を堅持しつづける。つまり、昂然たる態度で現実に臨もうとする「兵士」は「我々は誓いに縛られたまま守りにつくぞ!」と息巻いて「誓いに縛られた」その姿勢を一向に崩そうとはしない。ところで、この姿勢に対しても、リフレインはそれとは無関係であるかのように、がしかし意味ありげに、虚空に響き渡っているが、このことは注意を払っておくべき点だろう。こうしてみると、「兵士」の置かれた状況はそれぞれの連ごとに異なっているものの、そ

の一方では一貫して変ることのないものがある。それは異なった状況に立たされた「兵士」の採るその姿勢である。敵の嚇しにも味方（「料理人」）の朗報にも毅然として「兵士」はそれらを拒絶した。「古塔」を守るために、「誓いに縛られた」生を自らに課してどんな声をも拒絶する姿勢は終始変わることがなかった。敵をも味方をも拒絶して立つ位置から、果して「兵士」は何を見ているのだろうか。それを解く鍵は多分、リフレインのなかに隠されていよう。

各連に呼応して流れるリフレインもまた「兵士」の姿勢と同様に一貫して同じ情調を湛えている。リフレインの内容と「兵士」の姿勢とは無関係のようであり、実は深いところで通底している。いかなる状況にも拘わらず、それを拒絶して「誓いに縛られた」生を生きようとする「兵士」にも、しかしながら、拒絶することのできない状況が唯一の例外としてある。その状況とは、死を意味するといってしまうえば、間違いにはならないが、それではあまりにも漠然として短絡に過ぎる。実はリフレインこそ、決して拒絶することのできない状況というものを物語っている。

三連から成る「黒い塔」の各連に加えられるリフレインは、前述したように、本文の詩が連ごとにその内容を変えるのに対して、殆んど変わらない内容を伝えている。変わったのはそれぞれ最初の行だけである。第一連におけるリフレインの一行目は「墓ノナカデ死者ハ直立スル」と書かれ、第二連のそれは「墓ニ幽カナ月光リガサシテイル」と書かれている。そして第三連では「墓ノナカデ暗闇ハヨリ昏クナル」といった具合に変化が見られる。さらに補足すると、「浜辺カラ吹イテクル風ガウナリ声ヲアゲルト、山ニ眠ル枯骨ガユレル」という一節は、共通に歌われている部分である。いずれにしても変化がもたらされているとはいえず、「死者」と「幽カナ月光リ」と「暗闇」といい、また「枯骨」といい、どれもその意味には一貫して死のイメージが漂っている。また「墓場」と「山」も同じく他界を暗示していると考えられよう。しかし、そのように印象された死の世界は、そこに生の一端を垣間見させてもくれる。特に顕著なものとしては「墓ノナカデ死者ハ直立スル」その様態と、「風ガ吹クト枯骨ガユレル」その現象とに、動的なもの、つまり死を撥ねのけようとして抗う生の一端が感じられる。T・R・ウィティカーによれば、「直立

スル」という姿態は、墓場にそうした格好で納められていることだけを伝えるのではなく、死からの蘇りをも仄めかしている。つまり、「死者」の姿態には死と再生の意味がこめられているのである。⁽⁶⁾

確かにここは客観的には他界であるといえようが、しかし少なくともそこに、生の一端が窺えるからには、むしろ生と死の対峙する場所と考えるほうが妥当であろう。別言すれば、生でも死でもあるような、両者の交錯する場所をリフレインは創り出している。と同時に、その場所は生も死をも撥撫するような場所でもあったことを忘れてはならない。敵も味方も拒絶した「兵士」は、その抛って立つ位置から、このような場所に眼差しを向けているにちがいない。「兵士」とリフレインが通底しているのはこの点においてである。それゆえ、外界を拒絶した「兵士」は、リフレインの響きに耳を傾けることだけは拒絶できなかった。そうして「兵士」が眼を向けたその場所は、さらにより広大な地平に包まれていないだろうか。こうした事情が揺るぎない事実だとすれば、あの墓碑銘のなかにこそ、それは見出されよう。呪縛された生に固執する「兵士」も、諦念としての生（あるいは死）を受け容れようとしたクフリーンも、墓碑名のなかのあの眼差しを投げかけられた人物なのである。

(四)

「人間が死を創り出したのだ」とは、かつて彼の歌った「死」‘Death’ という作品の一節だが、イェイツは、生のまさに終局に至るまで死を死として敢えて信じずに、死をひとつの仮面として生のなかでてなづけて生かした詩人、つまり死の創造に生きた詩人である。「互いの死を生き、互いの生を死ぬ」というヘラクレイトスの言葉を、死の際まで意識したイェイツであってみれば、死を創造した詩人と呼ぶことにもさほどの抵抗は感じまい。イェイツが仮面の詩人でありつづけたということは、このように死の創造を通して死までも仮面に仕立てて生の領野を拡張しようとした熱狂に充ちた野望にそれを窺い知ることができる。しかし、熱狂に充ちた野望はその一方に冷やかなままでにし

たたかな氣質がなければ決して叶えられることはない。

死を意識すればするほど、生に執着するという二律背反のなかで動揺しつづけた詩人は、そうした動揺に不安を覚えながらも、低迷する生という、「存在の統一」に至るべき実存の原基を揺れるその二律背反のなかに打ち据えた。そしてクフリーンと「兵士」を同時に抱えた詩人の低迷する生こそ、墓碑銘の刻み込まれてゆく素地となっている。

Cast a cold eye

On life, on death.

Horseman, pass by!

(II, 93—95)

イエイツ最後の動揺

冷徹なる矜持をもって歌われたこの墓碑銘は、すべてを無化する思いとすべてを受容する思いとを混在させている。死出の旅に就く四ヶ月ほど前、すでに詩人が備えていた「冷やかな眼」は、まさに『最後詩集』を締め括るかのごとくこの二編の詩に注がれている。だが、それと同時に、そこには、圧倒的な死に囲繞されてもさらに人生と死を凝視しようとするイエイツのその「冷やかな眼」には、ほどなく、死がついに死であるという、あまりにも絶対的な永遠の瞬間が顕現するのであった。イエイツ最期のこの出来事は、詩人の仕事がここに初めて完成されたことを告げている。

△注▽

(1) W. B. Yeats; *Collected Poems of W. B. Yeats*, (London, Macmillan, 1977) p. 282, 引用の詩はすべてこの版による。

(2) See Brigit Biersby; *The Interpretation of the Cuchulain Legend in the works of W. B. Yeats*, (Dublin, Upsala,

- 1950) p. 104, p. 162. — ブジャースビーは、「死者」の前に登場したクフーリンは自分がすでに死んでいる事実に残んど気づいていない」と指摘しているが、生と死の拮抗に注目しないこの見解は受け容れ難いといわざるを得まい。
- (3) George Brandon Saul; *Prolegomena to the Study of Yeats's Poems*, (Philadelphia, Univ. of Pennsylvania Press, 1957) p. 176.
- (4) Jon Stallworthy; *Between the Lines*, (Oxford, Clarendon Press, 1963) p. 242.
- (5) Richard F. Peterson; *William Bather Yeats*, (Boston, Twayne Publishers, 1982) p. 181.
- (6) Thomas R. Whitaker; *Swan and Shadow*, (Washington, D. C., The Catholic Univ. of America Press, 1989) p. 260. — また、いまは亡き多くの「兵士たち」は語り手の内面に生きつづける、と見做す著者の解釈によれば、「兵士たち」と語り手は同一線上に位置している。すなわち、外界に自らを「震ワセテ」、しかし押し潰されることなく、外界と対峙すべく「直立スル」姿勢を採るであろう語り手に注目している(同頁)。